

う。3拍子は韓国音楽の基本的リズムであるから不思議ではないかも知れない。ただ小泉文夫氏の調査報告によるところの、農村の仕事歌で「三分割のリズムは皆無であった」(『音楽の根源にあるもの』青土社、66頁)。ただし朝鮮半島の一部の調査といふ事実からすると、珍島の例は(歌の譜例は明らかに3拍子を示している)いろいろな意味で貴重である。なおこのことは先の徳之島と同様に、この島の他の曲種(仕事歌、一般民謡、芸能等)との関連においても考察してみるべき余地を残しているようと思われる。

第四部は簡潔にまとめられた結論であ

る。ここでは、中国地方の田植ばやしを特色づける二系統の音楽は、けつして音楽だけが個々別々に生れたものではなく、それとも包み込んでしまう、もつと大きな常民文化圏というものの対照性から出たものであることを改めて論述する。対照物が並列すればその接觸点が問題となつてくるのは当然である。そして本書でもその点に関してはじっくり考察し、音楽的側面からアプローチすることによって対照的な二系統の交

流に明解な推論を下したことは前述した通りである。ところでこの結論のはじめに著者は、中国地方の田植ばやしの歌謡の発生について現存の「太鼓を伴わぬ短歌の田歌のようないづれな田植歌から」創造されたものであろうと推定されている。現存のそれらを果して音楽的にプリミティブなものと言いきれるかどうかは別にして、この推理をさらに发展させ、先の復元をも素材として田植歌謡成立への音楽的過程について追究することは不可能であろうか。

「人間と歌」に関心をお持ちの著者の研究は、既にテーマも、地域的にも、田植ば

やし以外の領域へと拡げられているが、田植ばやしに関する四国をはじめ著者も挙げておられるインド・ネパール、南中國など周辺諸外国の調査研究を進められ、第二・第三の結果を再び公けにして下さることを期待している。最後に、本稿は音楽的側面からのみ述べさせていただいたが、それも単なる部分的紹介に終つたばかりか勉強と読みの浅さは多々目立つたであろうが、お許しいただいたいと思う。

(昭和五十三年三月刊・雄山閣・A5判
・三六四頁・八、八〇〇円)

(おおぬき としこ・東京藝術大学)

内田るり子著『田植ばやし研究』

真鍋昌弘

田植草紙系歌謡を中心とする日本の田歌研究においても、これまでの歴史を纏めその系統・部門を示し、すでに将来の進展に資することができるまでになつた。歌謡の中でも、これは特に諸分野からの接近と解説を必要とするジャンルであるが、主によつて、『中世近世歌謡集』(岩波日本古典文学大系)に異色古典歌謡文芸として、

力によって、その研究は着実に成果をおさめてきたのである。古く大正十五年の、三上永人氏『東石見田唄集』あたりを皮切りとして、佐佐木信綱氏や白田甚五郎氏など的研究が続いていたが、特に志田延義氏の研究が続いていたが、特に志田延義氏によつて、『中世近世歌謡集』(岩波日本古典文学大系)に異色古典歌謡文芸として、

『田植草紙』が取り入れられてからは、めざましくその文芸性・民俗性・歴史性が問題となり、田植歌本や田植歌の調査も、それまでにもまして熱が入り、さらに、人々は現代伝承する田植歌の音楽面の研究を待ち望むようになった。

その現代に残存し、直接耳で確認し得る田植ばやしの実証的研究は、その後まもなく、内田るり子氏によつて始められ、氏の業績が音楽的研究史の中核となってきたと言つてよい。田歌研究の先達、牛尾三千夫氏を導師としてその調査を重ね、おそらく、『田唄研究』・5号（昭和38年11月）に、「田植ばやしの音楽的研究」を載せられて、その最初とされたのであつたかと思うが、内田氏の音楽的研究を加えて、田歌の研究はまた清々しい弾みをつけたのであつた。

「序説・田植ばやしとは何か」で「田植に際して音頭（男性）と交替唱で田植歌を歌い、早乙女（女性）と交替唱で田植歌を歌い、それに打楽器を中心としたアンサンブルがついて離す習俗」であるとし、「この音楽は稻の豊作祈願と田植の労働能率の促進という二つの機能をもつてゐる」ものであるとされ、それを「民族音楽学の方法論を駆

使して、単に音楽のみとり出して比較研究するのみでなく、文化を共時的、通時的に鳥瞰し、特に民族学・歌謡学の土台の下に音楽を考察した」と述べておられる。すなわち、習俗・文芸・芸能など広く見渡し、そうした諸々の条件の中で音楽を浮かび上らせる方法である。これは多くの人々にとって魅力的な巻頭言である。

音楽研究の枠外にある私は、本来ご紹介の適任者ではないが、音楽方面からの本格的書評はその道の専門家に委ねるとして、ここには私なりに重要なと思われる点、教えられた面を摘記して、簡単な紹介を試みることでおゆるしいいただきたいと思う。

本書は、第一部・総論、第二部・各論、第三部・日本列島周辺の田植歌、第四部・結論から成っている。

まず、第一部・第一章へ田植ばやしの系統と地域的分類では、総合的に見て、(1)備後系の田植ばやし、(2)安芸系の田植ばやし、(3)小笠原流の田植ばやし、(4)美濃・那賀郡系の田植ばやし、(5)安芸高田郡系の田

植ばやし、(6)山口・島根・広島県境の短章の田歌、(7)その他各地で歌われる田歌、に分けそれぞれにどのような調子や歌が伝えられてゐるかをまず示されている。この分類にそつて、主に(1)から(5)までの田植ばやしが論述されてゆくことになる。第三章へ田植ばやしの民俗では、田の神信仰、田植ばやし地域の稻作儀礼、田植ばやしの型態、田植ばやしと田樂系諸芸能との関係が主な項目となるが、なかでも型態の部分の「大田植」については、島根県能義郡広瀬町の比田大田植という具体的な記録によって述べておられる。田植ばやしの実体を見る上で、意外にも深い意味あいをもつてゐる伝承の端々にいたるまで耳を傾けながら、しかも五ページほどの簡潔な文としてまとめておられるのはさすがである。例えば、若嫁若婿や恋人同志で行なわれる「苗投げ」、「上早乙女」とか「歌わにや半役」といった歌を重要視する言い伝えなどの書き留めが、後の研究者にとってこの上もなく有難いことなのである。田植ばやしの音楽がそうした民俗伝承の中で根づいてきたのである。著者の熟練したフィールドワークの腕前を知ることができる。

第四章へ田植ばやしの文学では、田植歌本を用途の上から、本草紙とサゲが田にもつて入る手草紙の二種のあつたことなどから説きおこし、これまでの文芸の民俗学

的研究成果をよく踏まえながら、文芸が呪的に豊穣に作用すること、文芸が田植労働を支配し導いてゆくことなど、田に生きる詩の性格を把握しておられるのであって、その機能ははじめに述べられているように田植ばやし音楽の機能でもあつたわけである。氏は具体的に『田植草紙』の中から、『音楽に關係ある歌謡を中心、代表的なヤクウタ、私の好きな歌謡をあげたい』として例を掲げ解説しておられる。もともと、この「私の好きな歌謡」という表現には、論考の中で突然出くわし、やや気になる言葉であったが、結果的に見て、それが単に氏の好みからのみではなく、『田植草紙』を代表するもの、したがつて田植ばやしの詩として当然諸々の意味あいから掲出せらるべきものがたしかに選出せられて、いるわけであつて、やはり氏の見方のたしかさを物語つているものとしてよい。

第五章は田植ばやしの音楽▽で、総論の中心となるところである。田植ばやし歌謡の音樂的分類は、第一章でも述べられた(1)から(5)までの種類を、さらに詳しく音樂的に見て、一つには使用樂器の種類を加味し、二つには詩型・曲型の種類を加味してこの二つの面を融合して内田氏独自な分類

とその略号を示された。今ここにすべてを紹介することはできないが、例えば、樂器系大太鼓を用いる歌謡—O型、備後系歌謡—P型、太鼓を伴ねぬ歌謡—Q型とし、曲型詩型で、安芸系の親歌・子歌にあたる部分で、詩型は5 5 6 4を規準とするが一般に不定で曲型aa'またはabであるのをA型、備後系のダン・ツケにあたる部分で、詩型は5 7 5 7 5、曲型はabであるのをB型、安芸系オロシにあたる部分で詩型は7 7 4、曲型はcdなどとあるのをC型としておられる。例えば安芸系標準型は、安芸系大太鼓を用いるので、AC—O型、備後系標準型は、備後系大太鼓を用いるので、B—P型といった具合に記号を設定された。そしてこの分類された各様について、第二節でそれぞれ音樂的特性が詳述されてゆく。例えば、民謡の分類案としては、柳田国男氏のそれが基本になつておらず、C型がつきB型となつて、性格的にも安芸ナイズされたのではないかといふこと、もしくは安芸系のゆりうたBC型が備後地方に流れオロシを欠いて備後系の歌謡を形成したのではないかとも推察される」(同)の如く仮説を立てられた。安芸系と備後系という対照的な二つの文化圏を結びつけるポイントとして興味ある指摘である。

樂器においても、各地における種類・機能・形態・編成・奏法などについて述べられている。田植行事における樂器の機能について言及されていることは、民族音樂研究として当然必要なことであろう。ただし

認識することができるであろう。

この中で、見るべき説はいくつかあると思ふが、中でも、安芸系のゆりうた—田

の神おろし酒の歌など主に役歌用いられ、親歌・子歌の部分に必ずヤーレといふ離子詞がはいる、この優美な曲型が、むしろ備後系標準型に近いものであることを証明しようとしておられる。「備後・安芸両

系の交流の鍵をにぎるものはへゆりうた▽B型の存在である」(結論)とし、ここにその詳細を引用する紙幅がないが、「ゆりうたの起源が備後系にあり、安芸地方に來

てオロシC型がつきB型となつて、性格的にも安芸ナイズされたのではないいかといふこと、もしくは安芸系のゆりうたBC型が備

後地方に流れオロシを欠いて備後系の歌謡を形成したのではないかとも推察される」

篠笛にしる神楽笛にしる、笛については、「美しい情緒をそえる」のみではなく、もちろんそれが主に田の神おろしや道行に用いられていたことからしても、本来は儀礼的・呪術的心性に刺激を与えるものであったかと思う。また、奏法で、新庄囃子田の田鼓奏法圖解が示され便利であるが、その「散樂風の曲技」をするという説明では、どの振りがどの系統の曲技を思わせるのかといった面も私は知りたく思った。なお、日高只一氏『娯楽と民間藝術』にはもう一つ、余分の一本のバチを順々隣りの者にわたしてゆく「送り拍子」のあつたことが記されている。

ささらが、安芸系ではいわゆるさんばい竹か総指揮者さんばいの手に握られるが、備後系では道化役の持つ樂器として伝承しているのも、二つの文化圏をくつきりと見せておもしろいことである。なお田植ばやし樂器の歴史的資料としては、まだ、『たらかさね耕作繪巻』、『風俗画報』・明治24年2月号所載・土佐久保川村近方田植之図、久隅守景『四季耕作図』なども添えられてよいかもしれない。

第五節・音階の項では、「中國山地の田植歌謡の音階は、労動歌としての面からの民謡音階と、いっぽう神事歌謡の性格をもつ面からの律音階の存在がめだつていて、日本の他の地区の民謡の音階の分希とは本当に趣を異にしている。」と述べておられる。儀礼歌謡であり労動歌謡である田植草紙系歌謡の実体を、音階の面から確認していただいたことになる。「びわうた」（田の神送りなどにうたわれる）は、その90%が律音階であること、美濃・那賀郡系の「田神おろし礼歌」「苗取歌」は、50%が律音階であること、安芸系の苗取歌にもその傾向が強く50%を占めていることなどを調査され、神事歌謡としての性格が強く、比較的古い民俗歌謡であるとされている。将来の田植ばやし音階研究の基礎資料であろう。

かくして、はじめにも引用した、安芸系以下五地方の田植ばやしの特性が、田植ばやしの音樂の面からもそれぞれ実証されたことになり、ひいてはそれぞれの地方の民俗文化の総合的規定における有力な資料となつてゆくのである。

第二部・各論は、第一章から第五章に分かれられており、総論において述べられた五つの地域の、具体的かつ代表的な田植ばやしについてもいろいろな調子が紹介されていて、仕事田の音樂の豊富で多彩な様子がよくうかがわれるようになつていている。生活と音樂の融合している傑出した場所と機会

しの調査報告の形をとつてゐる。ここでも伝承・環境・組織などに広く注意しながらそれぞれの音樂面の特性を立体的に考察されている。民俗学的、文化人類学的な客観性と柔軟性をそなえておられる著者にしてはじめて描き得た五種類の手堅い田植ばやし記録である。

がうつし出されている。前掲の『田唄研究』・5号所載「田植ばやしの音楽的研究(1)」を土台にした部分である。

第2章は、広島県神石郡豊松村・供養田植の、昭和38年、同41年、同49年と三回にわたって採訪した詳細な記録研究で、地域社会の概観からはじまって、一年間の農耕儀礼、田植準備、田植ばやしの構成、代播図、サゲの継承選出、音楽的特色と進む。

サゲの継承や棚くぐりなどについては丹念に描かれている。牛尾三千夫氏『大田植と田植歌』に見える備後比婆郡東城町塩原・供養田植の考察と合わせて読むべきところかもしれない。なお所役の説明のところで代播(牛馬使用)・数十名、早乙女・數十名となるのは、口絵にある神石郡豊松村供養田植の写真を参考にさせていただくかぎり、ややその人数が食い違っているように思うがいかがであろうか。ただし、牛尾氏前掲書によると、塩原では、早乙女頭3名早乙女37名、先牛かき1名、牛をつれて参加するもの30名とある。

第3章・小笠原流の田植ばやしは、大田市大代町の伝承をとり上げ、「備後・安芸両系に繋がる田植歌謡としてその特色と価値」が述べられている。その一つには、

「曲型は、A・C型あるいはB・C型が心となつて安芸系の構造をもつたものが現在うたわれている。しかしこれらの歌謡の詩は、備後系にみられる一連の叙事詩(流れ)である。安芸系の歌謡はAあるいはBの部分を繰り返すとき同じ歌詞をくりかえすが、小笠原流では異なる歌詞を歌い、これが△流れ▽になつていて。このことからみても音楽的には安芸系、詩型では備後系の影響が強いといいう。これも小笠原流が備後安芸両系にまたがることを証する現存の事実である。」と結論されている。

第4章は、那賀郡三隅町黒沢の田植ばやしの調査になつていて。この地方の歌は、禱歌・大歌・引歌の形式をとつており、大歌の部分は、そのテンポによって、前さんづ・中の調子・引さんづ(緩・急・中庸の三段階)の変化をもつていて。苗取歌には一つ胴と二つ胴の歌い方があること、律音階の祭式的歌謡としての「田神おろしの礼歌」というのがあること、祭具として「ぼんてん」が加わることなど、多彩な音楽的様相が記されている。この系統の田植歌としては、すでに牛尾三千夫氏によつて、『井野串崎本田唄集』『黒沢三沢本田唄集』が翻刻されているが、文芸的に見てもいく

つかの特色が見られ、田植草紙系歌謡群の中でも、一つの注目すべき世界をつくつてゐると言えよう。

第六章・高田郡系の田植ばやしにおいても安芸系と備後系の関連性を考える上で重要な地帯であるとされ、結論として、「①安芸系ゆりうた→赤名節→備後系標準型田植歌。(②安芸系の田植歌謡オロンの部分→長歌→サヤキ節→大拍子)」を導かれた。

以上五地方のインテンプな調査は、多くの音楽的新見を打ち出されており、田植ばやしの実証的研究としてすぐれているばかりでなく、芸能民俗誌としても整然としたモデルとなつていてと思ふ。

さて、第三部は、徳之島の田植歌と朝鮮半島西南にある珍島の田植歌の考察である。第二部・各論の発展として、本州から離れた南と西の島に、このジャンルの歌謡を求められたのであって、本書の大きな特色となつていて。

徳之島の田植歌では、在住研究家の資料もあわせ参考にされながら、諸々の習俗を書き留めた稻作儀礼の概説をはじめにして田植歌の音楽的性格が述べられる。結論のみ引用すると、まず「徳之島の田植歌は、

詩型が8-8-8-6の琉球型であるのに、音階に琉球音階がなく民謡音階である。すなわち徳之島は日本内地の音階圏に属し、沖永良部島は琉球音階に属する。」ことを確認され、徳之島と沖永良部の間に民族的なボーダーラインを引くことができると興味ある考え方を示しておられる。今後、我々は文化の諸相の上で、この点に関心を向けておいてよからう。次に、この地方では田の神信仰はないが、かつてはノロ信仰に關係をもっていたであろうことについて、ノロが祭祀の後八月踊をおどることがあるが、その八月踊で田植歌がうたわれ、田植の場でも八月踊歌もうたわれるところから、両者の音楽的な類似ばかりでなく、民俗的・宗教的なつながりのあることも添えて、その説を支持されている。

田植歌唱謡法の面では、「女側の歌から男側の歌にひきつがれる時、すなわち歌かけの折りにボリフオニーがおこる」ことを指摘され、これは田植ばやしの「歌ヅマ」の系統でもなく、八月踊の「歌かけ」の方法とも異なつてゐるもので、「したがつて徳之島田植歌のボリフオニーは日本民謡中異色であると思う。」と述べられた。これは、ウタの掛け合いという我々にとって重要な

問題点にかかる指摘であつて、歌詞の面とともに大切な実体であらう。広く歌垣的民俗の考察にも参考となる。

珍島の田植歌の記録も、我が國以外の田植ばやしはどのようなものであつたか、どこにどのような形で残存していたのであるうか、といった我々共通の期待からして、魅力的である。稻作儀礼と音楽構造の面から、国内の田植ばやしと比較しながら述べておられるが、なかでも、種類をおさめる「神米壺」は、神石郡豊松村のものと同じであることや、そのリズムが、日本の2拍子系に対し3拍子であることなどの点は注意しておいてよからう。文学性のところでは、歌を翻訳紹介をしておられるのが有難い。顧わくは、その各様の歌詞をもつと多く掲げてほしかったと思う。なおついでながら、韓国の民謡（男謡・婦謡）・童謡・巫歌などを蒐集した民歌集や童謡集などはたとえば我が國の民謡・童謡と対照できる貴重な歌詞も多く含んでいるものと思われるのであって、今後より多くのものが翻訳紹介されるようになればよいと思う。もちろん諸外国のものについても同様であるが。

著者が力を注がれたところ、当然取り上げるべき事項などで、まだ多くを落していくことと思うが、以上私なりに簡略な紹介をする試みた。結論では、問題提起という形で「①中国山地内部の田植ばやしの音楽の交流と推移、②中国山地の田植ばやしとその周辺地域および東アジア・東南アジアにある田植ばやしとその関連性」の考察を今後方に期待されているが、まず①においては、安芸系と備後系とそしてその中間的な融合系の、それぞれの独自性と関連性を論ずること、②においては、徳之島と珍島の田植歌を取り上げて実体を解明すること、これらをみごとに為し遂げられたのであった。牛尾三千夫氏のあとがきにもある如く、中國地方の中でもまだ本書には洩れた地域の田植ばやし調査、二、三度くり返し述べておられるように、東アジアから東南アジア、モンスーン地帯、さらにはインドへまたがる田植ばやしの発掘調査なども、統いて内田るり子氏やその刺激を受けた人々によつて順次すすめられてゆくものと思う。この次ぎは、耳でも確め得るレコードかソノシートもほしいものである。

ともかく、民族（民俗）音楽研究者にはもちろん、口承文芸—特に歌謡研究者、さ

日本口承文藝學會役員

会長	白 田 甚五郎	(東京都)
理事	○ 建博清浩	(宮城県)
	○ 二之司二夫子	(広島県)
	○ 治彦良学	(神奈川県)
	○ 夫昭雄郎	(京都府)
	○ 吾夫正	(島根県)
	○ 文治守	(東京都)
	○ 一枝晃	(東京都)
	○ 一雄	(石川県)
	○ 一彦	(神奈川県)
	○ 千り	(高知県)
	○ 太建太	(東京都)
	○ 俊正和徳	(大阪府)
	○ 敬重	(山形県)
	○ 元武廣	(千葉県)
	○ 純美	(広島県)
	○ 謙治栄	(東京都)
	○ 武欣	(千葉県)
	○ (印は運営理事)	(北海道)
	○ 浅荒伊藤牛内	(新潟県)
	○ 遠大	(東京都)
	○ 小	(東京都)
	○ 小	(新潟県)
	○ 梶桂桜	(東京都)
	○ 関高武	(東京都)
	○ 德友直成	(東京都)
	○ ○ 野萩福水	(東京都)
	○ 三三宮山	(鹿児島県)
監事	鳥西	(東京都)
	羽尾	(東京都)
	修光	(東京都)

らには、人間と音樂といったようなことにについて広く考えてみようとする人々にとつても、真剣でダイナミックな、このような本を持つことができたのは幸運であった。内田るり子氏は、国内外を問わず、民俗

文化をしっかりと抱擁力をもつて総合的にかみしめることができる第一人者であることを、この書物が教えている。

この本『田植ばやし研究』は、黄金色のクロスばかりの装幀になっている。田植ば

やしを通して、やがて迎えた秋の田のたわわな一面のみのりをイメージさせ、氏のお仕事の豊かな熟成を覗的に象徴する結果になつたわけである。

(まなべ まさひろ・奈良教育大学)